

ヨエル書とラオディキアのセブンスデー・アドベンチスト教会—第十三

Jeff Pippenger

2025-12-18

十三番

私たちは現在、1863年の預言的象徴を取り上げています。私たちは、カデシュで頂点に達した期間にわたって彼らの死を招いた「安息」への古代イスラエルの反逆の象徴として、聖書におけるカデシュに焦点を当ててきました。こうして、レビ記二十六章の「七つの時」が退けられた1863年に、エレミヤの「古い道」が拒否されたことが示されています。

カデシュと1863年に関連する光を追い求める中で、私たちはカデシュに至る十の試みを特定してきました。最初の三つの試みはマナの試みだと特定しました。これら三つの段階は、奇跡としても試みとしても表すことができ、十の試みの第一である安息日は、第十の試みと対応しています。後者は、パウロがヘブライ人への手紙できわめて明確に「安息」として示しているものです。十の試みには、アルファの安息とオメガの安息があります。

ヘブライ人がカデシュで拒んだ「安息」を、預言を学ぶ者がどのように定義したいと望もうとも、それは問題ではない。というのも、預言的には、あらゆる「安息」(line upon line)は、「後の雨」である「安息と憩い」を指しているからである。カデシュは、後の雨のメッセージの拒絶、そして後の雨の経験の拒絶を象徴する最たる象徴である。というのも、カデシュにおいて十四万四千の者に施される封印とは、「知的にも霊的にも」真理に定着することだからである。

「神の民が額に印されるやいなや—それは目に見える封印やしるしではなく、知的にも霊的にも真理に確立され、もはや動かされない状態になること—神の民が印され、揺り動かすに備えができれば、それはやって来る。実際、それはすでに始まっている。神の裁きが今この地に臨んでおり、わたしたちに警告を与え、これから何が来るのかを知るためである。」『セブンスデー・アドベンチスト聖書注解』第4巻、1161頁

「『真理のうちに』『知的に』定着する」とは、神の御言葉の研究において「line upon line」の方法論を唯一の聖別されたアプローチとして受け入れることを意味する。この限定的なアプローチは、1840年8月に、「ミラーとその仲間たちが採用した預言解釈の諸原則の正しさを大勢の人々が確信し、再臨運動に驚くべき推進力が与えられた」とき、正しいアプローチであることが確認された。この「驚くべき推進力」とは、1840年に第一の天使のメッセージを世界中に送った聖霊の力の顕現を表している。

「驚くべき推進力」を表す働きに参加した者たちは、まさにその働きを担う力を聖霊の力によって与えられた。聖霊は、聖なる方法論を受け入れた者たちの間にのみ、その力を顕した。聖霊は、聖なる方法論を受け入れた者たちの内にのみ、その力を顕した。

知的に真理に定着することとは、line upon line
の方法論を受け入れることを指す。そして、その line upon line の方法論の「受け入れ」は、ラオデキア人には、聖霊なるお方として来られるラオデキアへの使者を迎え入れるために心の扉を開くこととして表される。この聖なる方法論を受け入れることは、知的に真理に定着しつつある者の思いのうちに聖霊の力をもたらず、その方法論の受け入れは、神性と人性の結合として表される霊性を生み出す。聖書的な line upon line の方法論を信仰と結び合わせて適用することは、知的に真理に定着することとして表され、また、その方法論によって生み出される真理（メッセージ）は、みことばであるイエスから切り離すことができない。そのみことばのメッセージを受け入れることは、あなたの思いのうちに聖霊を受け入れることにほかならない。ゆえに、知的に真理に定着することは、神の承認の印を受ける霊的経験を生み出す。

古代イスラエルにとって、カデシュは最後の試練であった。ヨエル書に登場する酒を飲む者たちは二つの群れに分かれており、ヨエルが他方の群れが飲んでいる発酵したぶどう酒と対照させて「新しいぶどう酒」と呼んでいる「後の雨」のメッセージを受け入れるか拒むかによって、互いに区別される。ヨエルの「新しいぶどう酒」は、ヘブライ人への手紙三章と四章におけるパウロの「安息」である。それはまた、イザヤのいう「エフライムの酔いどれ」たちが「聞く」ことを拒んだものでもある。彼が彼らに言われた、「これはあなたがたが疲れた者を休ませる安息であり、これが憩いである」と。だが彼らは聞こうとしなかった。しかし主のことばは彼らには、「戒めに戒め、戒めに戒め、定め定め、定め定め、ここにも少し、そこにも少し」となった。それは、彼らが行ってうしろに倒れ、砕かれ、畏にかかり、捕らえられるためである。

私たちは、アロンの金の子牛の反逆が、カデシュで完結する十の試練のうちの「二つ」を表していることを見出した。その試練が二つに分けられていることは、「獣の像の試練」によって表されている後の雨の試練期間と一致しており、それは神の民の運命を決定する試練である。黙示録13章は「反逆」を示している。というのも、「13」という数は反逆を表すからである。

章は、教皇制を象徴する海の獣から始まる。ダニエルがそれを「いと高き方に逆らって大言を語る力」として特定しているように、それは地上における反逆の第一の象徴である。その反逆に続いて、地の獣であるアメリカ合衆国の反逆があり、彼らはやがて全世界に自らの反逆の手本に従うよう強いる。この章における第三の反逆の型は、三つの反逆の最初、すなわちバチカンの象徴である海の獣に見いだされる。11節では、アメリカ合衆国は竜のように語り、このようにして獣の像、すなわちバチカンの像を造り上げる。12節以降、アメリカ合衆国は世界に同じことを行うよう強制する。アロンの反逆は二重であり、アメリカ合衆国の反逆を表すとともに、バチカンの世界的な像が強制されるときに起こる全世界の反逆も表している。

アロンの反逆は二つの時期を指し示しており、モーセがそこにいなかったときの偶像崇拜、続いてモーセがそこにいたときの偶像崇拜として表される。モーセは律法を受けていたため、反逆におけるダイビング・ポイントとして神の律法を表している。アロンの金の子牛像で表された試練は、1863年の試練である。

それは、生と死の分かれ目を示す日曜令の試練である。それは、約束の地に入るか荒野で死ぬかの分かれ目であり、獣の印か神の印かの分かれ目であり、ラオデキア人シェブナの運命かフィラデルフィア人エリヤキムの運命かの分かれ目である。マナによって表される最初の三つの試練は、安息日か日曜日かをめぐると論争を象徴しており、第十の試練も同様である。第五と第六の試練を表すアロンの金の子牛の反乱における分かれ目も、日曜令である。

第四の試みは、マッサの水（「試み」を意味）とメリバ（「エホバの旗印」を意味）であり、出エジプト記17章1-7節にあり、そこではそれが「主を試みること」とであると直接に述べられている。

イスラエルの子らの全会衆は、主の命に従い、旅程に従ってシンの荒野を旅立ち、レフィディムに宿営した。しかし民の飲む水がなかった。そこで民はモーセと争い、「私たちが飲めるように水を与えよ」と言った。モーセは彼らに言った。「なぜあなたがたは私と争うのか。なぜ主を試みるのか。」しかし民はそこで水に渇き、モーセに向かってつぶやいて言った。「なぜあなたは私たちをエジプトから連れ上ってきたのか。私たちと私たちの子どもたちと家畜を渇きで死なせるためなのか。」

そこでモーセは主に叫んで言った。「私はこの民をどうすればよいのでしょうか。彼らは今にも私を石打ちにしようとしています。」

主はモーセに言われた。「民の前に立って進み、イスラエルの長老のうちから何人かを連れて行け。あなたが川を打ったその杖を手に取り、行きなさい。見よ、わたしはホレブの岩の上であなたの前に立つ。あなたはその岩を打て。すると岩から水が出て、民は飲むであろう。」そしてモーセは、イスラエルの長老たちの見ている前で、そのとおりに行った。

彼はその場所の名をマッサとメリバと呼んだ。イスラエルの子らが争い、また彼らが「主は私たちの間におられるのか、いないのか」と言って主を試みたからである。出エジプト記17章1-7節

「マッサ」で表される試みと、「メリバ」で表される旗印は、モーセが同じ岩を二度目に打つとき、その預言的なオメガに至る預言的なアルファである。これは、十の挑発の第四がカデシュで表されていることを意味する。というのも、第二のカデシュは、モーセが反逆して岩を打つ場所だからである。これにより、象徴としてのカデシュには、旗印を生み出す水の試みが含まれていることが示される。

旗印を生み出す水の試みは、後の雨のメッセージの試みである。1863年は旗印が掲げられるはずだったが、ああ、1863年は第一のカデシュにすぎず、第二のカデシュは間もなく来る日曜法の時にある。マッサとメリバは、日曜法において旗印として掲げられる直前の十四万四千人に対する最後の試みを表している。キリストの死を取り決めたのは、ローマの権威でもユダヤ人の権威でもなかった。その権威は、十字架のはるか以前に天の会議で承認されていた。モーセは、神ご自身によって油注がれたその杖で岩を打った-ただ一度だけである。その岩は、靈感によれば1840年から1844年にかけてのメッセージによって表されており、それは義人の道を表す古い基礎的真理である。マッサによって表されている試みでは、人を救う水は、古い道の岩から湧き出る水である。その水は人々を試し、二つ

の階級を生み出す。すなわち、一方は獣の刻印のため、他方は神の封印のためであり、メリバによって表されているように、旗印として掲げられる者たちの上に神の封印がある。

神殿はアルタクセルクセスの第三の勅令の前に完成していた。これは、キリストが1798年から1844年に至る46年で建て上げたミラー派の神殿が、第三の勅令の到来によって表される第三の天使に先立って完成したことを確証している。十四万四千人は日曜法の直前に封印され、そして彼らは、いにしえの時と同じく、五旬祭の初穂のささげ物の旗印として高く掲げられる。マッサとメリバは、第一の天使と第三の天使の歴史において、真夜中の叫びのメッセージによって表される水の試練を指し示している。

神性と人性を結び合わせる働きは、二つの神殿の結合としても表される。また、それは、男と女、すなわち女性の神殿と男性の神殿が結ばれて一体となる結婚としても表される。キリストは、彼らを天にあるご自身の神殿へ導き、そこで彼らが「安息」を見いだすために、ミラー派の神殿を建てられた。この「安息」は、1844年の歴史の中で第七日安息日により表された。

第四の試験としてのマッサとメリバについてのこの理解を、三つの試験をも表している導入的な試験と、その後に来る第五と第六の試験に当たる日曜法との間に当てはめるなら、見る意志があるならば、三重のマナの試験が第一の試験であり、その後、アロンの金の子牛という第三の二重の試験へと進む試験が続くことが分かる。マッサとメリバは共に表されている。というのも、預言的な「二重」が位置づけられているのは第二天使のメッセージにおいてのみだからである。マナの最初の三つの試験は第一天使のメッセージである。マッサとメリバの試験は第二天使のメッセージであり、アロンの反逆は第三天使のメッセージである。

第五の試練はアロンの金の子牛の試練であり、反逆者たちが自分たちの露骨な反逆が神の目から隠されていると思ったときに、偶像崇拜の現れから始まる。

民は、モーセが山から下って来るのが遅いのをみると、アロンのもとに集まり、彼に言った。「さあ、私たちの先に立つて行く神々を造ってください。私たちをエジプトの地から導き上ったこのモーセ、この人がどうなったのか、私たちは知りません。」アロンは彼らに言った。「あなたたちの妻や息子や娘の耳にある金の耳輪をはずして、私のところに持ってきなさい。」そこで民は皆、自分たちの耳にあった金の耳輪をはずし、アロンのところに持ってきた。彼は彼らの手からそれらを受け取り、鑄て子牛の像を作った後、彫り物の道具でそれを形作った。すると彼らは言った。「イスラエルよ、これがあなたをエジプトの地から導き上ったあなたの神々だ。」アロンはそれを見ると、その前に祭壇を築き、布告して言った。「あすは主への祭りである。」

そして彼らは翌朝早く起き、焼き尽くすいけにえをささげ、和解のいけにえを持って来た。民は座って食べたり飲んだりし、遊ぶために立ち上がった。出エジプト記32:1-6

第六の試練は、モーセが十戒を授かって戻ってきたときに起こる、金の子牛の反逆の後半である。モーセは「主の側に立つ者は誰か」と問いかけたが、大多数は傍観するか偶像崇拜者に与し、仲介者であるモーセの面前で同じ反逆を公然と示した。

第五と第六の試練は、明らかに日曜法を象徴し、またそれと一致している。カルメル山のエリヤは、モーセがしたのと同様の問いを投げかける。「今日、誰に仕えるかを選べ」という呼びかけは、日曜法の試練を指し示している。獣の像に関する試練の象徴も、日曜法を指し示している。アロンの物語におけるレビ人の分離と、ヤロブアムの二つの金の子牛の物語における十二部族の分裂は、日曜法における賢い者と愚かな者の分離を示している。ラオデキア人は愚かな乙女であるとホワイト夫人が証言しているので、したがって日曜法における乙女たちの分離は、ラオデキア人とフィラデルフィア人の分離である。一つの二重の試練である第五と第六の試練は日曜法と一致しており、すなわち1863年とカデシュとも一致している。

出エジプト記第32章と第33章は、まさに同じ日に、数時間の差で成就しており、その日は1863年とカデシュを予表している。33章でモーセは神の栄光を見せてくださるよう願う。したがって、第五と第六の反逆において、モーセが十四万四千人へと変容しているのを見る。その同じモーセはまたカデシュで岩を二度目に打っており、こうして、自らその上に倒れることを拒んだために岩によって砕かれる一つの階級を表している。その岩は一つのメッセージであり、ゆえにカデシュにはモーセの二つの象徴がある。一方は神の栄光を現し、もう一方はその岩を拒む。

シオンの城壁の上で神の見張り人として立つ者たちは、民の前にある危険を見通すことのできる人々、真理と誤り、義と不義を見分けることのできる人々であれ。

「警告が与えられました。1842年、1843年、1844年にこのメッセージが与えられて以来、私たちが築いてきた信仰の土台を乱すものを、何一つ入り込ませてはなりません。私はこのメッセージに関わっており、それ以来ずっと、神が私たちにお与えになった光に忠実に、世の前に立ってきました。日々、切なる祈りをもって主を求め、光を求めながら、私たちの足が据えられたその土台から退くつもりはありません。神が私にお与えになった光を、私が手放すと思いますか。それはとこしえの岩のようであるべきものです。与えられて以来、ずっとそれが私を導いてきました。」レビュー・アンド・ヘラルド、1903年4月14日。

「カデシュのモーセ」の象徴の一つは、権威の象徴である杖で岩を打つことである。最初はそれが神の権威を表し、二度目は人間の権威を表している。二度目のカデシュにおけるモーセが象徴する一群は、エフライムの酔いどれとして描かれ、彼らは自分たちの神学的権威（杖）を用いて、後の雨のメッセージ、すなわち1840年から1844年の古き道のメッセージを攻撃する。

1840年から1844年に与えられたすべてのメッセージは、今こそ力をもって示されるべきである。多くの人々が方向を見失っているからである。これらのメッセージは、すべての教会に届けられなければならない。

キリストは言われた。「あなたがたの目は見ているので幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているので幸いです。まことにあなたがたに言います。多くの預言者や義人たちは、あなたがたが見ていることを見たいと願いながら、見ることができず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと願いながら、聞くことができませんでした」[マタイ 13:16, 17]。1843年と1844年に見られた事柄を見た目は幸いです。

「そのメッセージは与えられた。そして、時のしるしが成就しつつあるゆえに、そのメッセージを繰り返して伝えることに遅れがあってはならない。終結の働きは成し遂げられなければならない。大いなる働きが短期間に行われるであろう。まもなく、神の定めにより、大いなる叫びへと膨れ上がるメッセージが与えられるであろう。そのとき、ダニエルは自分の分を立て、証しをするであろう。」原稿公刊集 第21巻 437頁。

マナの第一の試験は三つの試験から成る。十の試験の最後は、第三の天使の試験である。最初と最後の双方が、試験の象徴として「休み」を表している。最初の試験は三つの試験で、第二の天使が後に続く第一の天使を表しているが、封印と旗印として掲げられることが関わる第四の試験は、マッサとメリバによって表されている。第五と第六の試験によって表される第三の天使は第三の試験であり、それはマッサとメリバの第二の試験およびマナの第一の試験に続いた。

民数記11章1-3節に記されているタベラにおける神の怒りを招いた出来事は、第七の試練である。「燃える場所」を意味するタベラが象徴する信仰の火の試練を導入する節の前には、神の民が荒野を移動していくさまを示す節が置かれている。第十章に現れた不忍耐は、小羊が行かれるところならどこへでも従う十四万四千人と対照をなしている。彼らは聖徒の忍耐を持つ者たちであるが、古代イスラエルは第十章で不忍耐を表し、そのことが第十一章の火の試練へとつながっていく。

彼らは主の山を離れ、三日の道のりを進んだ。主の契約の箱は彼らに先立って三日の道のりを進み、彼らのための休む場所を探した。彼らが宿営を出るとき、昼は主の雲が彼らの上にあった。箱が進み出るとき、モーセは言った。「主よ、立ち上がってください。あなたの敵が散らされ、あなたを憎む者があなたの御前から逃げ去りますように。」また、箱がとどまると、彼は言った。「主よ、お帰りください、イスラエルの幾万もの民のところへ。」民数記 10:33-36

次の節はタベラの反乱を紹介する。

民が不平を言ったとき、それは主の御前に悪いこととされた。主はそれをお聞きになり、主の怒りが燃え上がった。すると主の火が彼らの中に燃え広がり、宿営の端にいた者たちを焼き尽くした。民はモーセに叫び求め、モーセが主に祈ると、火は鎮まった。そこで彼はその場所をタベラと名づけた。主の火が彼らの中で燃えたからである。民数記 11:1-3。

火の現れに続いたつまずきは肉の食物への渴望であり、これは八番目の試練である。これは民数記11章4-34節に記されている。タベラでのつぶやきは、墮落した高次の性質、すなわち忍耐の欠如を表し、エジプトの肉鍋を慕う肉欲の反抗は低次の性質を表す。その火は、マラキ書3章における契約の使者による火の精錬を象徴している。というのも、預言的に言えばタベラは「燃える場所」を意味し、神の預言のことばにおけるその燃える場所はマラキ書3章に見いだされるからである。そこでは、火が、浄化の過程で取り除かれる不忍耐な人々と、ささげ物として清められる忍耐ある人々を生み出す。

タベラの高次と低次の本性に関する二重の試練において、モーセに代表される者たちとは、知的にも霊的にも真理に確立された十四万四千人のことである。知性は高次の本性を

識別し、靈的には神性と人性の結合を表す。低次の本性が十字架につけられて死んでいるときにのみ、神性は人性と結び合うことができる。知的にも靈的にも真理に確立されることは、封印される経験を表している。タベラの火は、キリストが十四万四千人の宮を建て上げる働きにおける、麦と毒麦の最終的な分離を表している。

第九の試練は、民数記12章に記されているミリアムとアロンの反乱である。この挑発は、コラ、ダタン、アビラム、あるいは1888年のミネアポリスにおける挑発と大差なかった。問題は単に神のメッセージを拒むことではなく、神が選ばれた指導者を拒むことだった。

メッセージだけでなく使者までも退ける指導者たちへの断罪は、第十の試練に先行する。第十の試練である日曜令の直前に、指導部は背教者としての姿を現す。日曜令は十字架に一致し、その十字架、すなわち日曜令へと向かう途上で、指導者たちは偽りのキリストであるバラバを選んだ。なぜなら、「bar」は「～の子」、「abba」は「父」を意味するからである。十字架（日曜令）、あるいはカデシュに近づくとつれ、指導部は偽キリストを選ぶことで背教が完全に露わになり、さらに世俗の当局に対して「我々にはカエサルほかに王はない」と直接表明する。

第七・第八・第九の試練は封印の過程を明らかにしているが、その例証は愚かなおとめのたとえである。これらの試練の第十は、1863年を象徴するカデシュでの最初の反逆であった。1846年以降、ヘブライ人は律法を受けるためにシナイへ導かれた。十戒の二枚の石板は、古代の文字どおりのイスラエルに対する神の契約関係の象徴であり、ハバククの二枚の板は、現代の靈的イスラエルの契約関係の象徴である。第二の板は1850年に示され、古代イスラエルが律法を守ると誓ったのと同様に、1856年までに、約束の地を偵察した斥候によって象徴される最終の試練がもたらされた。1856年から1863年までの七年間に形成された多数派の見解は、ラオデキアの荒野こそ自分たちが死にたい場所だというものだった。

1844年から1863年という時代は、紅海での洗礼に始まり、ヨルダン川での別の洗礼で終わる一連の出来事によって象徴される。後者は、後にイエスがヨハネから洗礼を受けてキリストとなられた、まさに同じ場所であった。紅海での洗礼は、古代イスラエルとの契約関係を示した。その関係は、同時に十段階の試練の過程を引き起こした婚姻によって始まった。彼らはやがてシナイへ導かれ、主の律法を守ると約束したが、そうはせず、カデシュでの最初の反逆において第十にして最後の試練に失敗した。四十年の後、そしてカデシュでの二度目でより大きな反逆の後、彼らはヨルダン川において洗礼を受けることによって約束の地に入った。

洗礼のすべての道標は契約と結びついている。オメガと第二のカデシュの歴史は、最初の、すなわちアルファのカデシュの歴史と一致する。モーセのオメガの反逆は、カデシュのアルファの反逆における国全体の反逆よりもはるかに大きかった。オメガのほうが常に大きい。この二つの反逆は共に、後の雨のメッセージの安息に入ることを拒む、イザヤの言う「学ある者と学なき者」の反逆を表している。

三つの洗礼（紅海、ヨルダン川、そしてヨルダン川）。最初はモーセによるもので、最後はキリストによるものである。ゆえに、モーセはアルファ、キリストはオメガである。ヘブライ文字の第一文字と第二十二文字のあいだにある第十三文字を、第一文字の後に続

け、その後ろに最後の第二十二文字を結び付けると、ヘブライ語の「真理」という語ができる。中間の洗礼はヨルダン川とカデシュにおけるものであった。紅海での最初の洗礼の後に、ヨルダン川での洗礼が続いた。しかし、ヨルダン川での最初の洗礼は、カデシュへの二度目の訪れと実際のヨルダン川での洗礼に至るまで四十年間延期された。第三の洗礼は、ユダヤ人に対する顧みの時を表しており、キリストがダニエル書9章27節の成就として一週のあいだ契約を堅く定める働きを始めたときに到来し、それは古代イスラエルに対する裁きの時であった。

紅海での最初のバプテスマは第一の天使のメッセージであり、カデシュへの二度の訪問は「二重化」を表す。というのも、カデシュへの最初の訪問とヨルダン川は、神の契約の民の反逆が象徴されている場所であり、二度目のカデシュでは指導者層の反逆が顕在化するからである。カデシュとその二度の訪問は、二つの階級が顕れる第二の天使のメッセージの二重化を表しており、両方の階級は一般の民と指導者の双方によって代表される。キリストのバプテスマは第三の天使のメッセージであり、麦と毒麦が分けられる時である。それは、古代イスラエルの審判の時に、古代イスラエルがキリストが娶ったキリストの花嫁から分離されたのと同様である。

1844年から1863年という期間は、紅海からカデシュでの最初の反逆に至るまでに当たる。1844年は紅海渡渉、1846年はマナであり、これは安息日試験の象徴である。ホワイト夫妻は1846年に結婚したとき、その試験に合格した。1849年には、主は御手をふたたび伸ばして、ご自分の民を集められた。主は、第一の天使のメッセージの時、ハバククの表の第一のものが歴史に現れた際に、すでに彼らを集めておられ、第二の表も同じ目的のために備えられていた。

オメガである1850年の表は、集め、試すためのものだった。なぜなら、アルファである1843年の表がそうしたからである。第一の天使は表を持っており、第三の天使も表を持っていた。第一はアルファで、第三はオメガだからである。「二つの表」は第一と第三の天使の道標であって、第二の天使のものではない。「表」の預言的期間は、誤りのある表で始まり、誤りのない表で終わる。二つの表の間の歴史は第二の天使の歴史であり、そこで図表は1850年まで脇に置かれる。

1844年4月19日に1843年が終わると、1843年の図表は脇に置かれた。というのも、その時点ではそれは誤って1843年を予告していることになるからである。1844年4月19日から1850年まで、ハバククの図表は存在しない。第二の天使の歴史においては、図表はなく、バビロンは陥落した。アルファは図表、オメガも図表であり、その中間はバビロンの陥落である。これは反逆の象徴であり、図表がなかった時期と結びついている。ハバククの図表の歴史的時期は、真理のしるしを帯びている。

1850年は、シナイと律法の授与によって象徴されていた。その出来事はペンテコステによって記念され、その時には二つのパンが揺り動かして捧げられた。パンを揺り動かして捧げる過程は、1842年5月の図表の印刷と普及、そして第二の図表が準備された1849年と、1850年にそれが入手可能になったという経緯によって表されている。この期間は、キリストの線においては、彼の復活からペンテコステに至る五十日として表され、その五十日は四十日とそれに続く十日に分けられている。

1849年にはキリストが二度目に御手を差し伸べておられ、1850年にはハバククの第二の表が利用できるようになり、カデシュへと至る試練の過程が進んだ。1856年には、運動の機関誌にミラーの基礎的な預言的啓示に関する新しい光が掲載されたとき、古代イスラエルの十の試みの最後のものが到来した。1856年から1863年まで、預言的な日数にして二千五百二十日のあいだ、斥候たちはその地を探るために入って行った。1863年には、彼らは自分たちをエジプトへ連れ戻すための新しい指導者を選んだ。

これらの真実については、次回の記事で引き続き取り上げます。

1871年12月10日、バーモント州ボルドヴィルで与えられた幻の中で、私は、私の夫の置かれている立場がこれまで非常に困難なものであったと示された。思い煩いと労苦の重圧が彼にのしかかってきた。務めにある彼の兄弟たちはこれらの重荷を負ってはこなかったし、彼の労苦を評価してこなかった。彼にかかる絶え間ない重圧は、彼を精神的にも肉体的にも消耗させた。神の民に対する彼の関係は、いくつかの点で、モーセとイスラエルの関係に似ていると示された。逆境にあってモーセに不平を言う者がいたように、彼に対してもこれまで不平を言う者がいた。『証言』第3巻、85頁。